

トランプ大統領の誕生には驚いた。だが私は既に同じものを何年も前に見ている。

既得権者への攻撃で支持を集める、ツイッターで刺激的な発言を繰り返し有権者に直接アピールする、過激な政策をマスコミがいくら批判しても支持は陰らない——**トランプ現象は、かつて大阪で巻き起こった橋下徹氏のブームとウリ二つ**であった。

橋下人気絶頂だった時、私は朝日新聞の大阪社会部で教育担当デスクをしていた。君が代強制、教育委員会制度の抜本改革……氏が次々と打ち出す施策は我々から見れば**戦争への反省から生まれた教育の否定**であった。問題点を指摘する記事を連日出した。**だがこれが読者に全く響かない**。それどころか「足を引っ張るな」という電話がガンガンかかってくる。

恐ろしかった。何が恐ろしかったって、それは橋下氏ではなく、読者の「感覚」からいつの間にかかけ離れてしまった我々のボンクラぶりであった。マスコミとは権力を監視し、庶民の味方をする存在のはずである。ところがいつの間にか我々は「既得権者」として橋下氏の攻撃を受け、その氏に多くの人々が喝采を送っていた。

一体我々とは何なのか？ 何のために存在しているのか？

この事態は今も続いている。安倍政権の政策にマスコミが反対しても世間は動かない。閣僚が問題発言をしても支持率は陰らない。それどころか権力を監視するマスコミの方が権力だと見なされている。アメリカで起きていることも同じだ。マスコミがトランプ氏のうそや破廉恥行為を暴いても有権者に響かない。マスコミはエリートで「我々の味方ではない」と考える人々が多数派となったのだ。

権力は暴走し腐敗する。それを監視する存在なくして民主主義は成立しない。庶民から浮き上がったマスコミにその役割が果たせないなら民主主義の危機である。これは我々の問題なのだ。

そんな中、毎日新聞は10日朝刊の記事「拡散する大衆迎合」で、大衆迎合主義が欧州で広がっていると嘆いた。まるで人ごとだ。大衆迎合でない民主主義などない。自分たちは大衆とは一線を画した存在だとでも言いたいのならそれこそが深刻な危機である。(東京本社発行紙面を基に論評)

いながき・えみこ

1965年愛知県生まれ。朝日新聞社で論説委員などを務め今年1月退社。近著に「魂の退社 会社を辞めるということ。」(東洋経済新報社)。

この文書は、「資本主義の先、見据えよ」(下記 URL をクリック) に掲載されているものです。>

<http://fileshelf.cocolog-nifty.com/blog/files/93.pdf>